

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス『ミハリス隊長』第二章（一）
Author(s)	其原, 哲也
Citation	プロピレア , 30 : 122 - 149
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055891
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ニコス・カザンザキス

『ミハリス隊長』第二章（一）

其原 哲也 訳

国際カザンザキス友の会日本支部会員

第一章のあらすじ

一八八九年三月二七日、オスマントルコ帝国支配下のクレタ島の都市メガロ・カストロ（現イラクリオ）は寒く強い風が吹くがよく晴れた日だった。仕事で忙しく賑やかな、いつも通りのウィーク・デイだったが、一部の者は何か大事件の起こりそうなきな臭さを感じていた。この日、魚屋で反トルコ活動家でもあるミハリス隊長は、トルコ

の行政長官であり幼馴染でもあるヌール・ベイにその邸宅まで来るように要請された。おりしも、フランス留学中の甥が今度の復活祭の日にクレタ島に帰省できないと手紙を寄越したと重なって、ミハリス隊長は激怒する。

気分転換のために港の方に散歩に出かけたミハリス隊長はたいして緊張感も無さ気な街の庶民たちの様子に拍子抜けするが、ヌールの飼い馬の凛々しい様子を見て心機一転し、ヌール邸に行くことを決心する。ゴシップ好きな元船長ステファニスからヌールとその妻で絶世の美女のエミネ・ハヌームの仲が良くないことなどを吹き込まれ苛立つが、重い気分を押し夕方ヌール邸に至る。

ヌール・ベイはミハリス隊長を煙草とラキでもてなしてから、近郷の村に住むミハリスの兄のマヌサカスが三月二五日のギリシャ独立記念日にモスクを冒瀆して村のトルコ系とギリシャ系の住民たちの間が一触即発の危機に陥っている、ミハリス隊長に事態の収束を依頼してきたのであった。ミハリス隊長は始めそれを断った。ヌール・ベイはミハリス隊長を懐柔するため、己が妻エミ

ネ・ハヌームを呼び出してミハリス隊長の前で得意の歌を歌わせる。ミハリス隊長はエミネの歌を聴いて、己がヌールへの叛意を見透かされたように感じ不機嫌になるが、却ってエミネからは気に入られてしまう。嫉妬したヌールはミハリス隊長への殺意を強める。慌てず驚かずその場を制したミハリス隊長は、ヌール・ベイに事態の収束を約束して悠々と引き揚げていくのであった。

しかし誰かにつけられているように感じたミハリス隊長は、尾行を撒く様に夜のメガロ・カストロの街を長々と歩き回る。

ミハリス隊長の家では、妻のキラ・カテリーナと長女のリニオ（一五歳）が夜遅くまで起きて、ミハリスの帰りを待っていた。ミハリス隊長の家にはその他に長男のトラサキ（一〇歳くらい）、次女の乳児の赤ん坊、住み込みの見習い小僧で甥のハリトス（一二歳くらい）が暮らしていた。カテリーナの父親は、ミハリス隊長の反トルコ運動の同志トラシヴロス・ルーヴァス隊長であり、彼は以前に運動に殉じていたが、今ミハリスと妻との関係は冷え込んでいた。帰宅したミハリス隊長は、

それでも落ち着かず、今一度出掛けようとさえするが、ギリシャ独立戦争に参加して戦死した祖父魁傑ミハリスのことを思い出して気を静める。中庭で愛馬を撫でているうちに気を取り直したミハリス隊長は、次の日にマヌサカスのもとを訪れ、明後日の日曜日に隣人達と宴会をやることを決めて、ハリトスに隣人たちへの言伝を頼むとようやく眠りについた。

第二章

その夜、メガロ・カストロはどんよりと曇り、暗がりに春らしい鬱陶しい空気が満ちていた。夜半少し前、ひりひりとした北からの微風が弱まり、やがて、暑くてかさの大きい柔らかい南風（フスコデンドリテイス）が起こった。アフリカ大陸を起点として、リヴィア海を貫きわたって、メサラ平原を、ティンバキとカリ・リミオネスからアヤ・ヴァルバラまで鋤砕いてゆき、後に古の名高い葡萄畑を残し、街の城壁に馬乗りになり、戸の隙間から窓の棧から落ちてきて、まるで女に重なる男のように、男に重なる女のよ

うに、彼らを眠らせないのであった。ゆっくりとした足取りで、狡猾に、ある夜、四月がクレタ島に踏み入った。

メガロ・カストロの軍司令官はじじいの老いぼれであったはずなのに、破廉恥な興奮を覚え眠りから跳ね起きた。掌を打つと、黒人召使のスレイマンが現れた。

「のスレイマン、窓を開けてくれ、おかしくなりそうなのじゃ……この不快なものなんじゃ？　のスレイマン、これは何という風じゃ？」

「ご主人。パシヤ様、アフリカ大陸から来ています、暑いですが、悪さは致しません、心配召さるな、我々クレタの者はアングル・メルテミと呼んでおります、胡瓜を成長させるからです。」

「まったくもう、忌々しい、アングル・メルテミめ。おい端女のファトゥーメを呼んで来い、好きだけ可愛がってやろうかい。それから水槽から水差しの水を持ってきてくれ。それから、扇ぎたいから扇子を……のう、このクレタというのは悩ましいところよのう！」

一方で、メガロ・カストロの府主教は大河のよ

うな白いひげの敬虔な八十代の老人だったはずだが、彼も目を覚まし、毛布をはねのけ、立ち上がって主教座の窓に触れ、深呼吸した。静寂に包まれた家々は暗闇の下で眠っていて、大聖堂の中庭では古いレモンの木がもう開花していて辺り一面が匂っていた。天空では無数の灯明が神の玉座の前で燃えていた……府主教は星の満天におのきながら没入し、一瞬その重い巨体は神の深い沈黙のうちに夜の風の中空に漂い——再びおもむろに大地に降り立って、窓の縁飾りに穏やかに触れているところを確認し直すのだった。府主教は十字を切り、暑い春の風は魔除けされ、老人は全身に涼しさと軽快さを感じ、寢床の上に戻って、神の穢れない抱擁に再び落ちてゆくのだった。

ミハリス隊長はシーツを投げ飛ばして寢床の上に荒々しく起き上がった。それは夜半過ぎだったろう。側の水がめをひたたくって口に押し込み、二三口飲んで目を覚まし、夜通し彼にまわりついてきた恥知らずな夢を追い出した。だがそれはまだミハリスを蛸の足のよう捕捉して女のよう絡みつき、逃がさないものであった。

「忌々しい眠りめ、くそっ」彼はつぶやいた。悪魔に心を開けば悪魔が入ってくる。

跳ね上がった裸足のまま階段を降り、中庭に出て井戸から水を引いて桶に頭を沈めて渴きを癒した。だが依然として口には甘ったるい吐き気が、眉間には激しい怒りが留まっていた。戻って寝台の上に座り直した。横にある漆黒の闇に連なる小窓を開けた。耳を澄ました。メガロ・カストロは眠りに沈んでいて、その息遣いは聞こえなかった。水と土の匂いのする奇妙な熱い風が吹いていて、中庭にある葡萄棚の葉っぱはさらさらと薄絹のような音を立てていた。

ミハリス隊長は背中を壁にもたせ掛けて煙草を吸い始めた。眠りに身をゆだね直したくなかった。それは奸悪で、信用が置けなかった。煙草を吸って、正面にある神棚を、一族の守護天使である神使ミハイルを、背中に矢筒を負った天国の魁傑ミハリスを見た。アイコン台の右には十字架が掛かっている、父祖伝来の銀のピストルが艶びかりしていた。その左には、蠟細工で出来たレモンの花の高価な結婚式の花冠があった。隣の部屋から、一

瞬、妻のキラ・カテリーナがため息をつくのが聞こえた。部屋の梁の上では鼠か何かがちゅうと鳴いたので、素早く一息に、物音も立てず、こっそりと猫が階段を上ってきた。そのあとは深い静寂が支配し、家はまた眠りに沈んでいった。

ミハリス隊長は煙草を吸ったが、激しい怒りも恥ずかしさも眉間を去らなかった。眼差しは小窓にくぎ付けになって、息苦しいまま、夜が明けのを待った。

そして、夜は更けていった。夜闇はまだ深く、破廉恥な風は好き放題吹き、家々に入り、フカロプリ三姉妹の真っ白な寝間着の手に十字架を握って、脇と脇をぴったりくつつけて、静かに動かず眠っているレース編みの天蓋付きの純潔な寝台の上も通り過ぎて行った。時々、アグライアがこんな夜更けに萎れた温かみのない腕を広げて、まるでくすぐられてでもいるかのようにヒヒッと笑った。しかし素早く品良き様に戻って棒のようにならなくなった。そして、広々として埃一つついてない天蓋付き寝台は腐ったマルメロの匂いがしていたが、その下に、姉妹の大量に集めた花嫁道

具の入った飾りのついた巨大な三つの長持があった。

夜半過ぎ、ミハリス隊長の兄である教師のテイテイロスが小机の前に座っていた。まるでまだ三月の北風が吹いているかのように肩に外套を掛けて、温まろうとしていた。分厚い本の上に身をかがめ、二一年の大蜂起を研究しているうちに、頭が混乱してきた。なんとという身内同士の争いと窃盗、裏切りだろうか。そして同時にその同じ戦士たちの行った、なんといくつものわが民族の英雄的行為と勇敢さ、自由への愛、天性の粗暴な振舞！テイテイロスは眼鏡をはずしぬぐうたび、これらの過ちを自分が犯し、書かれたことに責任があるかのように思い、見られなくなった。そして彼の眼は涙を湛えていて、数時間が過ぎ風が何度も吹き四月が入って来て、府主教たちと軍司令官たちが当惑しているときに、テイテイロスだけは前屈みになり、ぶるぶる震えながら眼鏡をすっかりぬぐうのであった。

テイテイロスとフカロプリ姉妹を除いて残りのメガロ・カストロの人々はこの生温い夜におの

いていた。独り寝の女たちは体の上からシーツを跳ね飛ばし、何が起こっているのかよくわからないまま息苦しいと感じていた。そして既婚の女たちは眠ったまま腕をむき出しにして自分の夫をまさぐった。そんな女たちの頂点に、港の近くの漆喰を塗ったばかりの貧家に住むガルファリアがいたが、それはもつともなことだった。なぜなら彼女は先の日曜日に行商人で美男子のカャンビスと式を挙げたばかりの新婚ほやほやで、今ヴェンドゥズスが言うところの「蜜の管」の真っ最中だったからである。トラサキが仲人になり、彼らはさらに最初の日々を家に閉じこもって過ごした。ガルファリアは目一杯この喜びを切望していたので、予想以上の大きな快樂で眼はくぎ付けになっていた。

彼女はもうすぐ盛りを過ぎるころで、実際、水をやっていない丁字のように萎れかけていた。しかし突然、ご覧のカャンビスが現れたのである。彼らを新婚夫婦にするべく神はカャンビスを遣わし、毎週土曜日に村を彼の歌で震わしたのだった。花婿はカストリナから来たのではなく、スファアキ

ア出身だったが、山を出て三年であり、故郷に帰ることはできなかった。確かに、父親は死ぬときに二人の息子に羊たちの群れを遺した。兄弟はどちらがその主の種羊を獲るかの分配で争った。残りの物を脱穀場の真ん中に置いてから、取っ組み合いのけんかをし、勝った方が自分のものに出来るということにした。しかしけんかしているうちに彼らの頭に血が上り、お互い兄弟であることを忘れ、ナイフを抜き出し合って、とうとうカヤンビスは兄を殺してしまった。直ぐに群れと主の種羊を捨ててあてもなく去っていった。メガロ・カストロで零落した。貧乏で職はなく、スファキア製の厚手のコートを着て、底の抜けたブーツを履き、目帯の枝を耳に挟んで、タヴェルナを回り歌を歌った。折よく、ある日ミハリス隊長が彼をヴェンドウゾスのタヴェルナで見かけ、その歌に耳を傾けて気に入り、呼びつけた。そして彼に言った。『もじもじするな、非の打ちどころのない若者だろ。戻って大テノール歌手みたいに歌っているか？ ほら、俺が元手を出して、お前が生きても何とか人間らしい暮らしができるようにしてや

る』ミハリス隊長が元手を出したので、カヤンビスは一頭の仔驢馬を買って、小物雑貨で二籠を一杯にして、村々を回って自分の商品を甘い声で歌った——糸巻や蠟燭、櫛、香料石鹸、手鏡など……。見返りとしてミハリス隊長が求めただ一つのこととは、およそ六か月ごとにミハリスが彼を呼びつけたら来てミハリスが手を挙げて追い払うまで去らないことだった。

ある日、クルソーナスという近在の大きな村で、泉の側にいるガルフアリアを見た。一目惚れした彼は村人に大声で尋ねた——良家の出で、両親は地主だということだったので、彼女に求婚し、許しを得た。先の日曜日に、腰掛けの上に持ち上げられたトラサキが彼らに花冠を被せた。なぜならミハリス隊長は、普段から言っているように、花冠を被せも、洗礼を受けさせもしないからであった。曰く、クレタを解放するのが先だ、と。

そして、今二重に門を掛けられたあばら家で、八日間の「蜜の管」が過ぎていった。時々カヤンビスは起き上がり、仔驢馬に餌をやった。時々ガルフアリアは起き上がり、料理してカヤンビスに

食べさせた。そしてその後で再び押しくら饅頭に陥り直すのだった。そして、主基督は彼らをイコン台からみそなわし、右手をわずかに揚げたまま、微笑んで、彼らを嬉し気に祝福するのであった。ただこうしていさえすれば、つまりはクレタのゆりかごの赤ん坊と小銃は手から手へ、父親から息子へとしっかり受け継がれてゆくだろうし、ただこうしていれば、いつの日かこの「蜜の管」の力でクレタは解放されるのかもしれない。

暖かい春の風がメガロ・カストロの彼方からも広がってきて、ヴェネツィア時代の城壁と汚染されたハンセン病隔離所のメスキニアから街の方に触れた。一画では、一組の男女が地べたを転げまわっていたが、彼らもまた新婚夫婦であり、猛烈に抱擁し合っていた。夫の指は病気でむしばまれ黄色い汚物の筋が入っていた。妻は鼻が無かった。年頃から腐り始め、結婚予定だった頃には落ちてしまった。しかし花嫁は気持ち良くなって我を忘れてキヤツキヤツと騒ぎ、白いハンカチで顔を隠すのだった。そして花婿は肘で彼女を抱えると、息子を作るため、ハンセン病が世界から完全に排

除されないようにするために奮闘した。

ハンセン病患者が抱擁し合っているときに、メガロ・カストロのもう一方の端、新門ケスリヤ・ポルトの近くでは、袖をたくし上げたバルバヤニスバルバヤニスが汗でずぶ濡れになり、カンテラを照らして手で持ちながら、細い小路を躓き歩きながら家路につき、己が運命を罵っていた。人々は彼をも気苦労なく放っておいてくれなかった。妻の死後、彼に残された唯一の楽しみは睡眠だった。夜明けから小路ソッカを巡ってメガロ・カストロの子に冬は温まるためサレーピサレーピを、夏は涼むためセルベティニセルベティニを振舞った。眠っている場合ではなかった。ある時は近所の女が、またある時は親戚の女が出産する。バルバヤニスよ、急げ、出産に立ち会おうのだ！バルバヤニスバルバヤニスが産婆の役もしていたのは、その技術を故人の彼の父親から習っていたからだだった。父親は蹄鉄打ちで世間の馬や驢馬の出産に多く立ち会っていた。バルバヤニスバルバヤニスは父親の技術を、馬や驢馬から人間の女に応用した。そして今夜、彼の姪である可哀そうなペラギアの出産に立ち会い、大きな困難に直面し、三時間の難産の末、ついに健康な、真黒な男

の子の赤ん坊を取り出したのだった。

そして、歩いて独り言を言って己が運命を呪っているとき、背後から馬の足音が聞こえていた。

しかしこの馬は、世間一般で知られているような、大麦を食べ、嘶き、糞をする馬のようではなかった。バルバヤニスはその柔らかく綿毛で包まれた花卉のような足音、風を浴びた乳香の聖なる香りに覚えがあった……バルバヤニスはこれは初めてのことではないと悟って、城壁にへばりつき、十字を切って、待った。柔らかく、軽やかな諾足の音が近づいてきて、香りが増してきた。

「主よ、我を覚えたまえ。おやおや、聖ミナス様、なんともひどい今晚は！」とつぶやいた。

恭しく視線を挙げて、見た。メガロ・カストロの男前の守護聖人、聖ミナスが道の隅から暗闇の中に現れて、金の馬具の赤毛の馬にまたがり、赤い旗竿を肩にもたせ掛け、短く縮れた白髪交じりの顎髭で、銀の鎖帷子を着て、輝いていた。聖人は、今夜も散歩をしていた。毎晩、街が寝静まった時間帯に、聖ミナスは物音ひとつ立てずにイコン台から降りてきて、城壁沿いを丹念に歩き、羅

馬^リ帝^シ国^ア民^スの界限を通り、もし家の扉が閉め忘れていたら閉め、もし基督者が病気でその部屋の明かりがともっていたら、立ち止まって治して下さるよう神にお願いするのだった。人間の眼には聖人を見ることはできないのだった。ただ犬たちだけがしつぽを振り、人間では町中ではただ二人だけが見る事ができた。バルバヤニスその人と、狂気の回教僧^ホのエフェンディナ・カヴァリーナだった。そして、聖人は散歩が終わり夜明けが近づく、また元のイコン台に戻るの、朝教会堂の番人のムルジュフロスが教会を掃き清めに行くときに聖ミナスの馬が汗をかいているのを見つけなければ、誰もどんな秘密が夜な夜な発生しているかわからないのだった。

バルバヤニスは聖人が離れていき暗闇の中に消えてゆくのを見届けてから、十字を切った。

「今夜もまた聖人を見ました。彼のおかげでわしの仕事もうまく行きそうです」とつぶやいた。

ペラギアのお産の手間賃として貰ったムストクール^ロを懐から取り出して、おいしそうにむしゃむしゃと食べ始めた。自分のあばら家によく

着くと、カンテラの明かりを消した。

ミハリス隊長は煙草を吸って、思ひは独樂の上のカブトムシのようにくるくる回り、生涯で見たこと味わったこと、愛した者や憎んだ者すべてをかき混ぜるのだった。――故郷の村、父親、家、人々、トルコ人、基督教徒、クレタ島の西の端グラブーサから東の端トプルーまで根付いている全クレタの修道院、帳尻を合わせるために言うなら、山の端から山の端まで、蜂起から蜂起まで。しかし、どこへ行こうが、ミハリスの呪われた思念は、立ち止まりたくはないのに、結局、恥知らずな赤い口元へ戻ってきて押し隠れ、これ以上姿を見せたくはないのだった。

ミハリス隊長はむきになって立ち上がり、ものすごい目つきで、まるで自分が立ち上がるのを責められているかのように、また神棚に涼しい顔をして威儀を正しているのを責めているかのように、神使ミハイルを睨んだ。それから振り返って、小窓から真つ暗な空を見た。

「夜よ早く明ける、夜よ明けやがれ、俺がなんで

落ちぶれたか見てやる！」と怒鳴った。

一階に降りて、中庭に入り、また頭を桶に突っ込んで、少しだけ落ち着いた。それから敷居のところにしやがみこんで、待った。

ミハリス隊長が孤独に葛藤しているとき、一方では、ヌール・ベイが男らしさについて一晩中迷って逡巡して、庭園に入って深呼吸して、家の中に戻り、何本も煙草を吸い、何杯もラキを飲んで、呻いていた。視線を二階の柳かごに上げた。チェルケス女は今夜は門を閉ざし、彼が近づくのを許してくれなかった。

「あんたなんかいらぬ、ヌール・ベイの赤っ恥さらし、私に近づかないで！」と、鍵穴の向こうから彼に怒鳴った。

女も眠ることが出来なかった。半裸で窓辺に歩み出で、チェルケス風の腕を羅馬帝國^{ローマ}国民居住区の方に差し伸べて、牡牛のようにしかめっ面をした。暗闇の中にミハリス隊長の眉、髭、手先を見て、雌馬のように嘶いた。

「もつともだ、妻がそうなるのももつともだ」ヌールはそうつぶやくと、突然嗚咽にとらえられた。

「わしもエフエンディナのようになってしまふのか。あの不信心者が浮かれ騒ぐたびに、わしを呼びつけてわしに道化芝居をさせるだろう」

翌朝黒人召使はご主人様が敷居のところまで泥酔して、丸まって眠っているのを見つけた。ヌールの髭と胸元、ズボンに嘔吐とラキ、煙草の吸殻でべっとりだった。

ヌールがエフエンディナについてあれこれ考えているときに、エフエンディナは仰向けになって眠って、嬉しそうに微笑んでいた。夕方頃、浮かれ騒いでもいいという神託、つまりまた、八日間羽目を外してもいいというメッセージを受けたので、豚の骨付き肉とソーセージを食べ尽くし、葡萄酒をたっぷりと平らげて、貧乏から——厄年にも遭つちまえ！——、また、おのれの聖性からも——こいつも呪われる！——解放された八日間を満喫しようとしていた。そしてエフエンディナは両眼を閉じ、ブロンドのあごひげを撫でてうとうとと眠り込んだ。そしてご覧のようにヌール・ベイが考え込んでいるときに、エフエンディナは、扉が開いて餌をたっぷり食って丸々と太った一頭

の豚がトルコ人のような帽子をかぶった姿で、家に入ってくるという夢を見た。首にはお守りのついたナイフをぶら下げていた。エフエンディナを真っ直ぐ見るや否や、ちんちんして、深々とお辞儀したので、彼女はナイフを外して、豚の喉仏に深々と刺した。エフエンディナは床を転げまわり、身をかがめた——そして何を見たのか？ それはレモングラスの葉に包まれ芳香を漂わす豚の丸焼きだった。エフエンディナは大声をあげて起き上がったが、口は唾液でいっぱいだった。

地上で哀れな人間たちが希望し絶望し苛み合い抱擁し合っているとき、天空の玉座は回転し、星辰は位置を変え合って、突如としてラシテイ高地の山々の頂から、空中に明けの明星が跳ね現れた。四のハリス隊長の家の中庭では、羽毛をまとった雄鶏がまん丸い目を開いて、天空で何が起こっているか理解し、羽を打ち、胸を膨らませて鳴き始めた。そしてお向かいの老百姓のクラソヨルギスの家の中庭では、さかりのついたキプロス産の雄驢馬が空に向かって鼻を鳴らして、冷やっこい美味

しい芝草とクレタ産の雌驢馬の匂いを嗅いで、尻尾をぴんと立てて鳴き始めた。

メガロ・カストロは起床した。街路の端からもう一方の端へ、イドメネウスの泉からトゥルパナスのパン屋まで、ミハリス隊長のお隣の主婦は大きく伸びをして、元気になり始めた。そしてキラ・マストラパデナはまず信仰心の篤い人である夫を、毎晩彼を縛り付けていたベッドの柱から鈴付きの縄を解いてやった。なぜなら夫に焼きもちをやいていたからである。夫が逃げないように、つまり――彼女は男というものがよくわかっていた！――こっそり降りていき、台所で下女で牝牛のような巨乳のむっちりアネジナと逢わないようにするためにだった。毎晩夫を徐にベッドの柱に縛り付け、彼が夜中の何時かに小用を足しに起き上がったときは解いてやった。そして再び縄は男のくるぶしに結び付けられ、マストラパデナはもう一方の端をしっかりと握って、愛する人がたまたまでも逃げおおせて悪い道にはまらないようにするのだった。ポリクシギス隊長がかなりの長時間に及ぶ艶っぽい夜のお勤めから、だいぶお疲れで香水をふん

ぶん漂わせて帰るところだった。デイミトロスおやじは、女房のキラ・ピネロピの脇であくびをしていたが、彼女の側にいることに耐えられなくなつて、シーツを蹴飛ばして呻いた。なぜって夫婦は四十五歳であり、ある時は女房の体がほてつて夢中になつても、ある時は冷えて身震いに襲われるからだつた。そんな時、夜明けに、ほてつて熱中していた。打ち捨てられて、気違いじみて敵意に満ちた眼差しをあくびしたデイミトロスおやじに投げかけてから、進んで隣り合わせに胸を窓の枠にもたせ掛けて、夫婦は涼むのだった。

天空は乳白色になつていき、家の屋根の縁の下では鳴き鳥が起き始めていて、お向かいのクラソヨルギスの家では、黒ツグミが鳥籠の中ですでに仕事を始めていて、ピューピュー鳴いていた。

「クラソヨルゲナは幸せなんだわ。クラソヨルギスは大百姓だし、それでいてまだ絶倫だし達者だから、奥さんの厚意を台無しになんてしないものね」キラ・ピネロピは呟いてため息をついた。

ピネロピは聞き耳を立てた。向かいの家から野牛のようないびきが聞こえた。仰向けになつて横

たわったクラソヨルギスは、太って、胸をはだけて、胃痛に悩んでいた。その髭は葡萄酒と玉ねぎの匂いがして、吐く息からは地下食糧貯蔵庫のような強くひどい匂いがしていた。男の隣には、幼な妻でバルバヤニスの娘で宴会好きで、丸々と太って酔っ払ったカティニツアが、まだ眠りながら微笑んで喉をくーくー鳴らしていた。というのも、婚約中だった彼女がとある閉ざされた庭園を散歩しつつ婚約者の手を取って、男の方も彼女の腰に腕をまわしてしつかりとつかんでいるという夢を見ていたからであった。そしてクラソヨルギスも小太りではなく、むしろしなやかで優美な若者であり、口髭はねじってとがっていて、髪は烏の濡れ羽色、ベルトに銀のピストルを差し、吐く息からは肉桂が香っていた。その彼とそっくりな男の肖像画の額縁を持って、彼は隊長夫人であるキラ・カテリーナの家に行くたび、その絵を誇らしく思うのだった。その絵には、下にこう書いてあった、アタナシオス・デアコス^五と。そうして、カティニツアを腰に抱くと、眠りは女の上に黒葡萄に覆われた葡萄棚のように伸びていき、女は親し気に

散歩してほほ笑んで鳩のようにくーくー鳴くのだった。

地獄耳のクラソヨルギスは睡眠の真っ最中だったが、女の声を聞いて、頑張って目を覚ました。

「ねえ妻よ、なんで舌なめずりをしているんだい、こんなに朝早くくーくー言って？ 黒胡桃かなんぞでも口に入れて食べたのかい？ 僕にも是非おくれよ！」と女に話しかけた。

しかし女は面倒臭そうに背を向けた。

「私を起こさないで、ほっといて、まだ眠いの！」そして両眼を閉じると、夢の暗闇の中に婚約者を見つけ出し直そうと奮闘した。

トウルパナスのパン屋からは、濃密で乳白色の朝一番の煙がふわふわと立ち昇った。老いたパン屋は心痛顔でむっつりと黙り込み、ただ一人で仕事をはじめ、己が苦痛を忘れるためにかまどの準備をするのだった。でも、一粒種の息子がいて二十歳のブロンドの美青年で下にも置かず目をかけて良い服を着せ、甘やかして育てたけれど、かれこれ三年前のある日、顔ができもので腫れて小指の毛が抜け、爪が取れ始めたことを忘れることが

出来なかった。そして今、唇まで腐りだしていることを。父親も母親も彼をメスキニアにやっつけてしまうことは望まなかった。どうしても一人息子と別れられなかった！それで、彼を自分の部屋に閉じ込めておいて人目に触れることが無いようにした。だから、老トウルパナスは安眠するどころではなかったし、口を開けて話すどころではなかった。パン粉をこね、かまどで焼き、取り出し、道を歩き回ってドーナツツやホウレン草パイを売り、仕事に忙殺されることで忘れようと一心不乱に励んでいた。だが、どうしても忘れることはできなかつた！毎朝一人息子を見に行くたびに、段々と髪の毛が抜け、階段とシーツに少しずつが滴っていくのを目にした。

老トウルパナスはかまどの準備をしながらため息をついたものだった。一瞬両目を挙げてお向かいのまだ明かりの灯った窓を見て、悲しげに首を動かした。

「可哀そうなフランス人よ、あんたも苦しんでいるのかい、不憫なやつ」とつぶやいた。否、人の腸はらわたに休まる時はないのだ……

そして、実際に一晚中その明かりは消えなくて、可哀そうなフランス人は瞼を閉じなかつたのだ。咳をして、唾を吐き、ため息をついていたのだった。彼女を花の都パリから世界の果てのトルコの田舎のここへ連れて来たのは夫で医者のカサパキスだった。彼女は始めたため息をつき、それから咳をし、今ではとうとう洗面器を引き寄せて吐血するようになってしまった。しかしこの医者は、なんと彼女をもう必要としなくなり、アルカロホリ出身ののつぽの下女と懇ろになってしまった。

「どこに鉄道があるのよ。家の近くに通っていない」クレタに来た最初の日このフランス人は夫に文句を言った。

するとちんちくりんの医者は笑った。

「俺たちメガロ・カストロの者は驢馬のことを『鉄道』っていうんだよ」と妻に答えた。

ミハリス隊長は中庭の真ん中に直立して、話さず、動かさず、天が夜明けを決断する時を待っていた。そして中庭で雄鶏の声が聞こえると、視線を挙げた。天空は乳色に白み始めた。跳びあがって

自分の部屋に上り、急いで服を着て、何回も幅広のベルトを腰に巻き付け中に黒い柄のナイフを挿して、神棚に吊るしてある小さな油壺を手にとつて神使ミハイルのアイコンを燻しているカンテラに注ぎ、自分の上官である神使ミハイルを見つめた。「俺は行きます。俺たちが言うべきことは全て言いました、それじゃあ、家をよろしくお願いします！」と、アイコンに向かって言った。

中庭に降りて、門の扉を開き、馬に鞍を敷いてその上に跳びあがり、「隔離病院の門」^六を指して行った。夜が明けた。兵士たちは鍵を受け取ると、四つの城門を開錠しに掛かった。まだ家々は閉まっていたけれど、いくつかの煙突は煙を吐いていた。バルバヤニスはまだ家を抜け出して、朝早くからいくつもの地区で、熱くて濃くてたっぷりの生姜をまぶした自家製のサレーピを呼び売りしていた。ミハリス隊長は雌馬に拍車をかけて急いで基督者殺しの大鈴懸の木を通り過ぎ、広場へと迂回してトリス・カマーレスへ着くと、一瞬立ち止まって辺りを見回した。周囲の山々は全て薔薇色に色づいていた。ミハリスの前には岩山のカ

コン・オロスがあり、後ろには雪を冠った偉大な盟主であるプシロリス山が藍色にそびえていた。右にはユフタス山の大理石の竜のひっくり返った頭があった。彼方では、白く波立った水の上に青緑色の軽い疾風が通り過ぎていった。マルタのトロール船団は、黒いクレタ海でもう赤い帆を開いていた。太陽が温かい時化を伴って波間から姿を現した。雌馬は振り返って、太陽を見て両目を輝かせ、うなじをゆすって嘶いて、お早うの挨拶をしたのだった。

トランペットが鳴り、竿にトルコの国旗が掲げられ、鉄の城門が軋み続けながら開いた。夜明けから城外で待っていた田舎者たちが、木材や木炭、葡萄酒や油の革袋、野菜や果物の籠、青銅製の水差しに入れた蜂蜜などを積んだ驢馬やらラバやら共々押し合いへし合いしながら一斉にまっすぐ城内になだれ込んだ。彼らが城内に入るためには、全幅がヴェネツィア時代の城壁で仕切られている真つ暗なトンネルを通らねばならなかった。そして石造りのドームの下をくぐってから、声や悪態、動物や人々の喚き声、足の騒音は弾んで弾けた。

暗闇は騒音で満ちて、地下の人々は喉を唸り声で満たした。

ミハリス隊長は騒々しい群衆の間に道を作り、野原に出て、波打ち際に下って、メガロ・カストロを後にし、海岸沿いにカコン・オロスとルセーに向かって行った。右手には真緑色の大地が匂いたち、左手には海があった。太陽は南下して馬の胸に金貨のお守りのようにぶら下がった。

「基督と神使ミハイルの御名において」と、ミハリス隊長はつぶやいた。

東の方を振り向くと、十字を切った。

大城塞^{メガロカストロ}全体が陽に覆われていた。始めミナレットが陽に染まると、やがて聖ミナス教会の水色の

ドームと家々の屋根が染まり、間もなく陽光はずぶ濡れの小路に降りてきて居座った。娘たちは窓を開けてから中に入り、おばあさんたちは庭に出て暖をとった。おばあさんたちは十字を切ると、怨敵であった寒の戻りの三月が過ぎ去り、これから体の芯から温まってゆくであろうことを神に感謝した。四月の聖ヨルギス^セさまの日が晴れますように、と。

全ての城門から朝早くクレタ産の仔驢馬達がすばしっこく、上機嫌で、尻尾をぴんと立ててなだれ込んでメガロ・カストロ^ツ子に春が来たことを広く知らせて鳴いていた。

キラ・ピネロピは自分の家の中庭で体を伸ばしてあくびをし、骨を軋ませた。四重顎ででっぷりとした腰の、よく食べよく消化し、洗濯し、掃除する中年女で、夫であるデイミトロスおやじに馬のように餌をやり毛繕いをして、毎晩夫を再び元気にしようと奮闘していた。子供はいなかったの

で、猫やカナリア、春の野原を愛好していた。今朝早く妙な身震いが彼女の背中を貫き通したので、もしも尻尾を持っていたら、もしも人ではなかったら、彼女はこの尻尾を立てて鳴いて、キラ・カテリーナやクラソヨルゲナ、マストラパデナや院長夫人、つまり近所のすべての女性たちに訴えたであろう。どうしてまだぐずぐずしているのか、立ち上がろう、陽を浴びよう、みんなで一斉に嘶こう、野原で転げまわろう、春が来たのだ！と。

今日は四囲の壁は開け放たれていたもので、大急ぎで料理して家事をやり終えると、隊長夫人のキラ・カテリーナの家の門を叩いた。

「あの、私のご主人様ご主人様の、デイミトロスの妻のピネロピさまから、あの、もしよろしければ、食べ物を持って、野原にピクニックに行つて、お食事しませんか、とのご挨拶です。良い夏を過ごしてください、ですって」

しかし隊長夫人は、明日の夜明けからやって来る五人の食いしん坊のために準備していて家を留守になどしていなかった！ めんどりを絞めて、一羽を煮て、もう一羽に松かさ詰め込み、鶏冠

のついたやつを焼いておつまみにしていた。

「残念ですが。あなたのご主人様ご主人様に言つて、今日はミハリス家は無理です、お許しください。今日でも、もしよろしければ、午後は繕い物をして、ご近所の皆さんも来るし、アリ・アガも来るから、みんなでおしゃべりしましょう。まあ今日はミハリス隊長も一日中いないことだし、心配ないわ」

キラ・ピネロピは顔をしかめたが、小間使いを直ちにほかのご近所さんに遣わせた。マストラパデナに、クラソヨルゲナに、ポリクシギス隊長の娘に。しかし、一人にはマノリス神父が聖別式をするのを待っていると言われ、もう一人は頭痛と眩暈がすると言い、ポリクシギス隊長の娘は丁度夕飯のために小麦粉をこねていたところ足が膨れて揺れることもできないと言つてきた。

「死にぞこないども、失せておしまい！」苛々して、キラ・ピネロピはつぶやいた。「あんたらの眼は節穴か。それともひよつとして贅沢なものにしか興味がないのか。さあ、マルリオおー、院長夫人の、マセーラのところに行つておいで。あの人

なら分かるわ。それにフランス人だから、春と云つたらきつと来るわ！」

彼女の本名はマセーラではなくマルセルなのだが、キラ・ピネロピは分かり易く言い易いようにマセーラと呼んでいた。我々もクレタの慣わしに従ってそう呼ぼう。彼女自身マセーラという呼び名は、どうにかこうにかギリシャ語が分かるので気に入っていて、常日頃鷹揚な態度でパリっ子というのがどんな存在か説明し続けた。つまり、パリっ子はメガロ・カストロっ子よりも背が高くて、その小路からは一本の太い川が流れ貫いているので、女性たちは闊歩し、カフェニオンでは男性たちと大胆にも話をして、くるぶしから上の足をあらわにしていると。そんな出まかせをとあんたは言うけど、魅力的で当事者でもあるフランス人女性が言うところを、そしてそれを彼女自身信じていて、その証に何度も涙ぐんでいるところを御覧なさい。それにしても、何が働きの彼女の夫を、閣下の気を引いたのだろう。ちきしよう、失せておしまい！ 恥ずかしげもなくアルカロホリ女と付き合って……あのかわいそうなひとはピクニツ

クに来るわ、気晴らしにアヤ・イリーニハまで飲み物をたくさん持って出掛けましょう。

しかし小間使いはしかめっ面で戻ってきた。

「駄目、あの、無理ですって。一晚中咳をして、眠ってませんから、あの、後日にしてください、今日は勘弁してくださいって」

キラ・ピネロピは激怒した。頭の中でご近所さんをしらみつぶしに当たった。コリヴァケナを呼ぼうかしら、いや、駄目だわ！ あの女の旦那は、どうか必要になりませんように、墓堀人だし、あの女はヒポコンデリーで幽霊が見えるから、死んでもがそっくり枕元を通り過ぎるのよね。いい気味だわ、だって確かに旦那は死人の衣服を剥ぎ取って着ているし、女房や餓鬼どもに着せているし、死人たちは地面のあんな湿ったところにすっぽんぽんで置かれていたのだから怒り出すのもっともだわ……そういう訳でコリヴァケナは嫌だった。また変人のアルホンドゥーラに遣いを送ろうとしたが、彼女が小間物屋のキラ・ピネロピの散歩に付き合ってくれる厚意などあるうはずはなかった！ 父親は通訳官^{ドラヅマノス}九だったので、帝都^ポで総主教と

プレファア○で遊んで、あの時は夢中だったので、毎年リラ金貨の年金の詰まった財布を総主教管区から勝ち取って、箱詰めの黒い魚卵を食べているのであった！ いや、もう食べていなかった！ 府主教も軍司令官も、もう彼女と交友はしていなかった！ 若い時分、大いにえり好みをして自らを恃んでいたんだから、自業自得で、嫁の貰い手がいかなかったんだわ！ いい気味だわ！ 弟が耳が不自由なのもいい気味だわ！ 親の因果って子に報うんだわ……だって一度確かあいつらが帝都にいるときに基督教徒を、トルコ野郎を殺した罪で絞首刑にすることになったんだけど、あいつらの父親の通訳官が——あの男の骨がタールにまみれますように！——代官以外で事件の真相を知っているながら基督教徒を殺した基督教徒でないなんてありえないし、どこであの臆病者の通訳官が口をはさめたんだか分かりやしないわ！ 恐ろしくて黙っていたのよ。だから一人息子が口もきけないうよう生まれついたのね！ 駄目、キラ・アルホンドウーラはピクニックに連れてかないし行きたくもないはずよ！

ピネロピは高慢ちきの家の大門から撤退するという英断を下して、さらにその先に向かった。『ヴァンゲリオを呼ぼうかしら？ でもあのひとだつてどこに突っ込んでくか分かったもんじゃあないわ、花嫁道具を準備している最中だもの。今度の復活祭に、確か、教師のティティロスと結婚する予定だもの……一体全体どうしてあの可哀そうな人はあの男を選んだのかしら？ 青瓢箪で、半人前の眼鏡男を……それでどんな風にあの男を愛せるっていうのかしら？ だってくそつたれな貧乏じゃない……あのひとの持参金を金の時計をしたろくでなしのにやけ男のあのひとのお兄さんが放蕩三昧に使い果たしちゃったわ！』

キラ・ピネロピは人事を尽くしてから、決断した。水槽によじ登り、葡萄の木から葉っぱを一枝切って、台所に入り、お弁当を葡萄の葉で包み、籠にパンとオリーブの実、数個のオレンジ、一瓢の葡萄酒、アルコールランプ、コーヒー、砂糖それに食器類を入れて、中庭に出た。

「マルリオおー、ついてきなさい、じゃあ、あの連中に用はないわ！」と小間使いに言った。

玄関の鍵を閉めて、港の方を目指して行った。幅の広いお尻の肥満体型でそれを自覚していた。散歩している今突き出てゆらゆら揺れていたが、最近クレタ島に輸入されたカラマンニ産のふさふさした太い尻尾の羊か何かのようだった。この哀れな人は自分のお尻が揺れるのが分かっていて恥じていた——しかしどうすることもできなかった！『この脂肪は神様がお与えになったもの』と言って自分を慰めていた。『私の足だってポリクシギス隊長の娘のキラ・フリサンティの足と同じようにまた腫れなければいいけど——名実ともに！神様のおかげで私はまだ敏捷だし、まだ自分の脂肪をコントロールできるし、持って行けるし、振り回されたりなんかしないわ、小娘どもを十人倒せるし、若者十人だって私を押さえつけられないわ、私をでかぶつ女とでも言うがいいわ！』

お尻を振り振りしながら、ストラータ広場の商人たちや職人たち、田舎者たちの大群衆を通り抜けていった。『こいつらメガロ・カストロっ子ども、なんて大声、喧嘩腰、いかつい顔、下品なのかしら！』キラ・ピネロピは物思いに沈んで唇

をすぼめた。彼女はレシムノ人でそれを誇りにしていた。ハニア人は尚武で、レシムノ人は学問で、メガロ・カストロ人は飲酒で有名だった。毎晩仕事が行けるとみんなタヴェルナに居座り、「おう！ 持ってきてくれ！」と言いつつ飲んで、干し鯖と櫛焼肉^{スツラキ}を食べて、葡萄酒やラキ、肉料理の臭い匂いを放っていた。ゆっくりしらずと歩み、深くお辞儀をし、上品ぶった物腰のレシムノ人など居ようはずもなかった！ ただ夫のデイミトロスだけがメガロ・カストロ中で別格だったが、この男は、目出たいことに、くたびれ果てた意気地なしだった！ 復活させようと夜何をやっても無駄だった！ 『私の骨折全部水の泡だわ……ああ、いつそ夫がレシムノ人だったら良かったのに！』

ため息をついた。道を急いで港に近づいた。『夫は座り直して蠅叩きを動かしているでしょう。あの人が出来るのはそれぐらいだし、それならうまくやっているでしょう』と考えた。

しかしデイミトロスおやじは朝から蠅叩きを動かしかつ続けたので疲れて、今は帳簿をパラパラめくって眺めていた。その帳簿は毎日どんな料理を食

べたかが二色のインクで記入されていて、赤は肉料理を、茄子紺色はその他の料理を表していた。研究に没頭するあまりレシピ集を読んで、料理法をぶつぶつ反芻して、口の中を唾液で満たした：最近食通が嚙んで含めるようにゆつくりただどしく音読していた。例えば以下のように――

『一八八九年三月二〇日、アンギナーラ^二と玉ねぎの新芽をそえた新鮮なそら豆。たつぷりの油。よくできた。――三月二二日、ニンニク入りカボチャのかまど焼き。呪われたパン屋のトゥルパナスが焼いてくれた』

女童^{めわらわ}が一人店の入り口に現れて言った。

「デイミトロスおやじさん、ご主人様のフリストファケナのおかみさんの遣いで来たんですが、甘味用の、ええと、五ドラム^三のヒオス島製のマステイハを下さい」

しかしピツオコロスの息子デイミトロスおやじはうんざりしていた。大儀そうにゆつくりと視線を帳簿から持ち上げて、棚の方を示して言った。

「嬢ちゃん、私ああなたの欲しいものは分かってる、分かっているよもう。その棚の上だよ、ふあゝ

あ！」

そして可能な限り大声を出しながら引つ張り出してきて、マステイハがいかほど世界の果てにあるかを示してみせた。

女童^{めわらわ}が立ち去るとデイミトロスおやじは再び研究に没頭した。『三月二五日、生神女福音祭^四、葡萄酒と魚の解禁^五。鱈のレモン煮。鱈のパセリ添え、玉ねぎの煮物。鱈のニンニク炒め。胡瓜サラダ。とても美味しかった』

しかし研究し深掘りするのにも疲れて、再び蠅叩きを取って、ため息をついた。『私は名高いピツオコロス隊長の息子だが、落ちぶれたものだ！祖父は松明を持ってトルコ軍のフリゲート艦を焼き討ちしたものだし、父はライフルを持ってトルコ人を殺したものだ、私は蠅叩きを持って蠅を殺している始末だ……ほら丁度頼つぺたに！』そうつぶやくと、その善良なしもぶくれの頬に染みをつけた。そして豪傑だった父親のことを思い出すや否や、店は狭くなり、彼はもうそこには収まり切れなくなり、腕を広げて左右の壁に手をかけ、ちようどサムソンと同じように、壁を打ち倒して

世界を広げ、ピツオコロスの息子デイミトロス氏は怒りを爆発させんとした。

壁を揺さぶって打ち倒そうとするや否や、店は暗くなった。敷居を埋め尽くさんばかりに、のっぽででっぷりと太って息を切らしたキラ・ピネロピが現れた。女房を見るや否や、デイミトロスおやじは顔を顰めた。『どんな恐ろしいことをまた私に求めてくるだろう？ 夜はまだ来てないよな？ どこからこのあばずれはあんな元気が出てくるんだ！ お尻にテレピン油でも蓄えているんだろうか。ひえーっ、はしたないレシムノ女ときたら！』

「よう！」と大声で言っただけで帳簿を開いた。「ねえデイミトロス、立ち上がって」妻は夫に大声で呼びかけた。「立ち上がって野原に出かけましょう。ダメな人ねえ、あんたも、カビが生えちまうわよ、体の芯から温まらなきゃ！ 中にこもってたら蛙みたいに青白くなるばかりよ！ 動きなさい、ほら！ お弁当は持って来たわ。あんたの好きなものもあるわよ……」

首を傾けて、夫の耳元に屈んで言った。「たっぷり胡椒の載った茄子のドルマデスもある

わよ……あなたによく効く良いものがあるのよ、特に戸外の野原でね！」

デイミトロスおやじは身震いした。

「私あ行かない、行かない！」そう叫ぶと、売りにしがみついた。

「いらっしやい、デイミトラキス一六、お願いだから来て、困らせないから！」

しかし夫は蠅叩きを激しく揺り動かして、あたかもそこに蠅がいたかの如く、キラ・ピネロピが銀蠅であるかの如く、妻を店の外に追い払おうとしたのだった。

「私あ行かない！」と再び絶叫した。「今日は仕事で沢山あるんだ、ほらこの通り、帳簿をつけているんだ、どんな借りがあるか、誰に貸しがあるか、店の今後を考えなきゃならん。お願いだから、お前ひとりで行ってくれ」

「じゃあ、マルリオおー、ついておいで！ あんたが私のお隣さんで夫だわ！ 青空の下で一緒に食事しに行きましょう！」とキラ・ピネロピは自分の小間使いの首根っこを掴んだ。

デイミトロスおやじに軽蔑を込めて普通の倍の

お尻を向けて、家の後ろの方に直ちに進んでいった。

「私の運命なんて糞喰らえ、私は粹で、食いしん坊で、上戸で、達者な男と結婚して、一ダースの子供をこさえて賤けるべきなのだわ！　そして貴族の暮らすレシムノで暮らすのよ、田舎者のメガロ・カストロっ子達となんて御免よ！」とつぶやきながら行つた。

独り言を言いつつ、腹を立てながら行つた。もうお腹が空いてきたので、太陽が高くなるのを見て鼻の穴を開け閉めし、真新しい干し草の匂いを嗅いだ。ちびっこのマルリオの首根っこを掴み、荒々しく引つ張っていた。マルリオは息を切らせながら籠を背負って、足を踏み外してスリッパが脱げて、脱いだと思つたらドルマデスの上にそれらを置き、裸足でご主人様の後ろにぴたりくっついていった。

聖ミナス教会から外に出てキラ・ピネロピは立ち止まった。十字を切つた。

「聖ミナス様、あなたはわたしの願いをよくご存じです。お助けください！」とつぶやいた。

話し声と笑いの大声が聞こえて、狭い小路に子供たちがあふれ、鐘が鳴つた後に学校の方に走つて行つたので、キラ・ピネロピの心臓はドキツとした。立ち止まって、子供の群れを誇らしく思った。『あーあ、この子たちがみんな私の子供だった。』あーあ、この子たちがみんな私の子供だった。『あーあ、この子たちがみんな私の子供だった。』あーあ、この子たちがみんな私の子供だった。『あーあ、この子たちがみんな私の子供だった。』

一瞬ピネロピの眼は濁り、頭の中には方々の小路や村、種々の夢で見た粹でいなせな男たちの一群が思い浮かんで走り去つていった。「神様は私をお許しになるに違いないわ。でも私の観るところ、バルバヤニスの奥さんが浮気女だったのは確かだわ……何人もの男と子供を作つたのよ！　神様だけがそれを知っているし、クラソヨルギスの奥さんのカティニツアもその内の誰かと作つたのよ！　で、バルバヤニスには朴念仁であつてほしいけれど、段々疑念が萌もしてきて、職業柄角はよく見えてきたし触つたし手で弄いじり回したものだけど、でもどうしようもなかつたのよ！　一度重い病気になつて奥さんを枕元に呼び寄せて言つたのよね。『ねえ妻よ、言ってくれ、信じる神様に誓つて、真実

を。わしらの子らは皆わしの子なんじやるか？』
でもバルバヤニナは黙ってた。『妻よ、言ってくれ、
本当のことを。わしは、ご覧のように、何が怖い？
死にかけている！』——でももしあんたが死なな
かったら？ もしあんたが死ななかつたらどうな
るの？』と雌豚は答えたのよ」

そのことを思い出してキラ・ピネロピは微笑み、
学童たちが通り過ぎたので脇へ退いた。隊長夫人
であるお隣さんの息子のトラサキに気づいた。

「トラサキや！　トラサキや！」　大声で呼んで、
オレンジを一個あげようと籠をまさぐった。

しかしトラサキには聞こえなかった！　両腕を
広げて近所の子供二人の肩を掴んでいた。右側に
マストラパスの息子のマノリオスを、左側にクラ
ソヨルギスの息子のアンドリコスを掴み、歩きな
がら話して大声で笑っていた。飽きずに同じこと
を何度も言っていた。昨日いかに教室の敷居に散
弾を撒いたか、そしてそれは丸い肩をしたティテ
イロスが日曜日の遠足で子供たちに歌わせる歌の
歌詞『春はまた来た花は来た……』を教え始めた時
だった。全員が声を囁らし始めた時、ティティロ

スもいい気分になって鞭を振り上げた。

「皆、校庭に行こう、みんなと一緒に歌おう。明
後日トリス・カマーレスに立ち寄るから恥ずかし
くないようにしよう……さあ次！」　と言った。

背をぴんと伸ばして前に出たが、勢いよく敷居
をまたいだ瞬間散弾の上で滑って皮袋のように地
面に落ちた。ティティロスの眼鏡は粉々に砕けた。

「先生の骨が折れる音が聞こえたって言ったよ
な？」　アンドリコスが尋ねた。「ひよっとして折れ
なかつたのか心配だぜ」
するとトラサキが安心させた。

「ありや折れた、安心しろ、折れた、ぼきっとい
う音が聞こえなかつたか？　あれは骨だった」

「で、『うっ！』て言ったのを見たって」とマノリ
オスも言って喜びで手のひらをこすった。「確かに
先生の腰骨は折れて、もう立ち上がれなかつたつ
て。『あいたた！　あいたた！』って叫んで眼鏡を
必死に探していたって」

「こんな風に遠足から解放されたんだから、俺た
ちは俺たちで決めた仕事をやろうぜ。賛成か？」
「賛成！」　二人の仲間は叫んだ。

犬が一匹通り過ぎたので、石を拾って後をつけた。

聖ミナス教会の近くの回教修道院で叫び声と言

い争う声が聞こえたので立ち止まった。
「ハミデ・ムラがエフェンディナをぶつんだぜ、
待つてようぜ、面白そうだ」とトラサキが言った。

三人は足指に力を入れて立ち上がり、道路から
生垣の隙間を見た。青々とした大きな庭が目の前
に広がって、多彩な色の襪褌布の帯に覆われた聖
人のお墓が真ん中にあつた。お墓の隣ではぼさぼ
さ髪で裸足でとがった鼻の年若い母親が一方の
手に自分の息子の首筋を掴み、もう一方の手で二
又の杖を持って息子を脅しつけていた。

「お前、神様が怖くないのかい？ また羅馬帝国
民の所に行って豚肉を食べて、葡萄酒を飲んで、
糞してくるつもりかい？ このすつとこどつこい、
お前を閉じ込めて、打ちのめして、行けなくしち
まうよ！」

エフェンディナは母親の手の爪から逃れようと
もがいた。絞殺されそうだとばかりにギャーと絶
叫した。

「お前を行かせない！」母親は叫んで息子を揺さ
ぶった。「お前を行かせない！ お前が行くたびに
受けている嘲りを忘れたのかい？ 酔いが醒めた
ようになって悔しがって、涙を流してターバンを
外して、禿げを何度も晒して、馬糞を塗りたくつ
て小路を戻ってきてきて驢馬のように喚いているじや
ないの……で、羅馬帝国国民はお前を煙たがってほ
らエフェンディナだ、エフェンディナ・馬糞臭い
が来たつて叫ぶんじゃないの！ あれほどの聖人
だったお前のお爺さんに恥ずかしくないのかい？」
母親は呪いの言葉をまくしたてながら絶叫して、
多彩な色の襪褌布で覆われたお墓を息子に示した。
「いつでも爺さんのことは考えてるよ！」エフェ
ンディナはそう言うと言手を高く上げた。「おつかさ
んよう、神様に誓って、昼も夜も爺さんのことは
考えてるよ！」

「だったら、なんで糞するの？」
「おつかさんは俺に聖人さまになってほしくない
の？ 爺さんのような？ 一体なんだつておつか
さんは俺に聖人さまになってほしいの、もし俺が
罪を犯していないならば？ もし罪に陥っていない

いならば、悔い改めるだろうか？ 泣くだろうか？ 神の名を叫ぶだろうか？ おのれの禿げをみんなに見せるだろうか？ いいや！ じゃあどんなやり方で俺は聖人様になれるんだろうか？」

ハミデ・ムラは開いた口がふさがらなかつた。息子とお墓を代わる代わる見て黙り込んでしまった。実は、この気の触れた息子は正しいことを言っていた、つまり、古老たちから彼女の祖父である聖人について聞いたことは本当だったのか？ 彼は全生涯を通じてどうしようもないワルであり、老いぼれてもうお酒も肉も女も嗜むことが出来なくなつた時、聖人への道に身を投じたのではなかつたか？ それで聖カテリナ修道院^{ミナレト}の尖塔に上つて下りてこようとせず、飲まず食わずただ泣いて胸を叩いて大声で神を呼んでいた。七昼夜遠吠えし続けてメガロ・カストロを震撼させて空は地獄のような雰囲気ではなかつた。神は彼を憐れんで、食事をとるように、苦しむことのないようにというお告げを下した。結局これが彼が聖人になる方法だったのである。

ハミデ・ムラは頭が混乱してよく分からなくな

り、甘やかされた息子を打擲^{ちやうちやく}し始めて、庭の隅に追い詰め陽に当てぶるぶる震えさせた。二又の杖をお墓に凭せ掛け、手の爪をエフェンディナの首から外して掌を広げてムンジャ^ハのしぐさをした。

「ほら、お前がしたいこと何でもするがいいさ。食うなり、飲むなり、けつをほられるなり。で、その後で禿げに馬糞をこすりつけるんだね！」

そう言うのと、庭の中の隅の隅だまりに向かつて、うんざりと足を引きずって行った。

「可哀そうにな！」アンドリコスが憐れんでみせたが、エフェンディナを責めはしなかつた。

「ほつとけよ、俺の親父が明日エフェンディナを叱りつけるからさ」とトラサキが応じた。

トラサキは友達をせつついた。

「行こう、明日太陽が沈んだら、準備万端だ！ 俺がお前たちを迎えに行くよ。パチンコもすっかり持つて行くようになる。俺は綱も一本持つて行くから」と言った。

「じゃあ俺は杖を一本」とアンドリコスが言った。「じゃあ僕は杭を一本」とマノリオスが言った。

「フロガトスの息子のニコラスも連れていこうぜ。あいつは力持ちだからな」

「でももしあの子のお父さんに出くわしちゃったらどうしよう？」とマノリオスは心配して立ち止まった。

「ふん、俺たちは見つかったりはしないさ」とトラサキは軽蔑の素振りを示した。「あの男はクレタ人じゃない。シロス島の出じゃないか」

「でも俺たちはあの子を持ち上げることができないかなあ」とアンドリコスが異議を唱えた。「だって百オカ^一九はあるんだろ。それにもし大声を出されたら？」

トラサキは眉根を寄せた。

「アンドリコス、言うことを聞け。この仕事には度胸がいるんだ。嫌なら出て行け、他の奴を見つめるから」

「出て行けだって？」とアンドリコスは苛々して言った。「俺の度胸は満点だぜ」

「なら明日それを見せてやろうぜ」とトラサキは言うと言ふを速めた。

少年たちはさらに学校に近づいた。

「今は黙っているよ！」とトラサキは指図した。

「お前ら、うっかり他人に漏らすなよ！俺の親父は明日酔っぱらうだろうから、俺たちは自由だ。で、お前ら、ずらかる時は晩禱に行くって言っておけよ。そしたらおふくろさんが灯明代にコインを一枚くれるだろうから。それでストラガリニを買おうぜ」

「あの子にも買ってやろうよ」マノリオスが提案した。

「おいおい、誰があの子に買ってやるって？俺たちで食べるんだよ！」とトラサキは言った。

（本稿には現代の観点からは不適切な、卑猥語とみなされかねない表現や特定の病氣の人を差別するかのような表現が数箇所含まれていますが、原文の雰囲気や尊重し、当時の価値観を伝えるためにあえて残したところもあります。文責は全て訳者に存します。）

訳注

- 一 パナイト・イストラティの長編小説『キラ・キラリナ』（一九二三）の登場人物に、「サーレプ売りの、崇高な魂の持ち主のバルバ・ヤニ」がいる。パナイト・イストラティ（一八八四―一九三五）はルーマニアのブライラ出身のフランス語作家。「バルカンのゴリキー」とも呼ばれ、カザンザキスのロシア時代の親友。
- 二 サレーピは蘭の球根を乾燥させて粉末状にしたものから作った濃厚で口当たりの良い菓湯。トルコ語 *sarılep* に由来する。セルベティは甘くて冷たい飲み物。
- 三 葡萄ジュースと砂糖を混ぜて捏ねた小麦粉で作ったドーナツツ。
- 四 クレタ島東部、ラシテイ県にある高地。
- 五 *Αθανάσιος Διάκος*（一七八八年―一八二一年）ギリシヤ独立戦争で活躍した中央ギリシヤ出身の義賊、軍人。
- 六 *Λαζαρέτου την Πόρτα*（ラザレトウ・ティン・ポルタ）ラザレトウはペスト療養所、伝染病院、隔離病院の意味。イタリア語 *Lazzaretto* に由来する。
- 七 三世紀後半にカッパドキアで生まれたローマ帝国の軍人で基督教徒。ディオクレティアヌスまたはコンスタンティウス帝の時代に迫害され、殉教した。聖名祝日は四月二十三日。

八 イラクリオの南8キロメートルの所にある地名。

九 ドラゴマノスともいう。スルタンの宮廷における通訳官又は翻訳官。通例トルコ系ではない。

一〇 三人が三十二枚のカードで遊ぶトランプゲームの一種。

一一 トルコ南部の都市。十三世紀半ばから十五世紀末まで栄えたカラマン侯国の首都があった。

一二 食用アザミの一種。

一三 旧トルコの重量単位、約3・2グラム。

一四 マリアが、天使ガブリエルから、救い主の母になると告げられたことを記念する東方正教、カトリック、ルター派など教会諸派に広く共通する祭日。カトリックで言うところの受胎告知日。

一五 原文では *κατάλας*。

一六 デイミトロスの愛称。

一七 イラクリオの聖ミナス教会の近くにあった修道院。現在ではアヤ・エカテリニ教会と呼ばれ、美術館になっている。

一八 掌を広げて前に突き出し相手に示すしぐさ。侮辱を表す。

一九 旧トルコの重量単位。約1・2キログラム。

二〇 煎られて塩漬けにされたヒヨコマメ。ドライナツツとして食べられる。

参考文献

辞書類

- AN INTERMEDIATE GREEK---ENGLISH LEXICON,
FOUNDED UPON THE SEVENTH EDITION OF LIDDELL
SCOTT'S GREEK---ENGLISH LEXICON, OXFORD
UNIVERSITY PRESS, First edition 1889
Collins gem GREEK DICTIONARY, Fourth Edition 2009,
Harper Collins Publishers, Glasgow, 2009
『句読点活用辞典』、大類雅敏編著、栄光出版社、東
京、二〇二三年
『角川類語新辞典』、大野晋、浜西正人、角川書店、東
京、一九八一年
ギリシア史、トルコ史
『ギリシア史』(上、下：YAMAKAWA SELECTION)、
桜井万里子編、株式会社山川出版社、東京、二〇二四年
『一冊でわかるギリシャ史』、監修：長谷川岳男、村田
奈々子、河出書房新社、東京、二〇二二年
『中公新書 ビザンツ帝国 千年の興亡と皇帝たち』、
中谷功治、中央公論新社、東京、二〇二〇年
『中公新書 オスマン帝国 繁栄と衰亡の600年
史』、小笠原弘幸、中央公論新社、東京、二〇二〇年
『臨場感あふれる解説で、楽しみながら歴史を』体感

“できる世界史劇場 オスマン帝国の滅亡と翻弄され
るイスラーム世界”、神野正史、ペレ出版、東京、二〇二
三年

カザンザキス関連書籍

Nikos Kazantzakis, *Freedom and Death*, Translated by
JONATHAN GRIFFIN, Faber and Faber Limited, London,
1966

『ニコス・カザンザキス研究——ギリシア・ナシヨナ
リズムの構造と処方箋としての文学・哲学』、福田耕佑、
松籟社、京都、二〇二四年

『キラ・キラリナ』、パナイト・イストラティ作、田中
良知訳・解説、未知谷、東京、二〇〇九年

卑猥語、差別語関連

『欲望会議 性とポリコレの哲学』、千葉雅也、二村ヒ
トシ、柴田英里、角川書店、東京、二〇二一年

『岩波文庫 北條民雄集』、田中裕編、岩波書店、東京、
二〇二二年

本作品を成す上で福田耕佑氏の変わらぬ懇切
な指導と援助が大きな役割を果たしたことを
振り返り、ここに深甚なる感謝の意を表します。